

(様式第4号)

論文内容の要約

|  |  |               |       |
|--|--|---------------|-------|
| 保健医療学研究科 保健医療学専攻<br>博士後期課程 作業療法学分野   | 平成31年 4月 2日入学  |               |       |
| 学籍番号   | 2196003  | 令和4年 3月 12日修了 |       |
| 氏名   | 井上 香   | 主研究指導教員       | 平山 和美 |
| 論文題目   | A difficulty in counting similar juxtaposed items after subarachnoid hemorrhage: a case report |               |       |
| 【要約】(文章の順番を守り、論理立てて記載してください)   |  |               |       |
| <p>局所脳損傷に伴い似たものの数を数えることの障害が起こりうる。この視覚計数障害は、それ以前に見た場所の記録ができないことが原因であるという仮説がある。しかし、この仮説を直接的に検証した報告はない。また、視覚計数障害が患者の日常生活に与える影響を記述した研究はない。</p> <p>60歳、右利きの男性が、25年前にくも膜下出血後に右の側頭・頭頂葉などの梗塞を発症した。以後、同じようなものが複数並んでいると数えることが困難となり、25年間続いていた。この障害のため日常生活では、マークシートの塗る位置を誤る、買い物レシートのゼロの数を間違える、同型同色の瓶の数を数えられない、吊るし柿のスケッチで干し柿の数を描き間違えるなどの問題があった。患者はその理由を、「視線を動かすと直前にどこを見ていたかわからなくなる。そのため、似たものが並ぶと、先に見た場所の目印がないので混乱する。対象を端から次々に間を飛ばさないよう気をつけて見ていくのだが、うっかりすると数え間違える」と語った。</p> <p>前述の仮説を検証するために、この症例と健常対照者に対し以下の視覚計数検査を行った。モニター上に、垂直方向に並んだ1個から7個までの黒円を疑似ランダムな順序で、静的、動的の二条件で提示した。静的条件では、黒円の列を画面中央に制限時間を設けず提示した。動的条件では、黒円の列を画面中央、垂直方向にスクロールして提示した。移動速度は5.5度/秒、一つの円が画面上に現れてから消えるまでの時間は3秒であった。対象者には、列が現れたらできるだけ早く黒円の数を言うように依頼した。眼球運動計測装置を用いて、声と視線の動きを記録し、両条件における反応時間、停留点と停留時間を求めた。結果、静的条件では、症例が健常者よりも有意に反応時間が長く停留点が多かった。その中央値の違いは反応時間、停留回数とも症例が健常者の約10倍だった。しかし、停留時間には差がなかった。動的条件では、反応時間、停留点と停留時間ともに両者に差がなかった。</p> <p>以上の結果は、前述の仮説と症例の内省報告を直接裏付けるものと考えられる。また、動的条件では視線を動かす場合でも主に滑動性追従性眼球運動を用い、衝動性眼球運動を必須としないことから、本例の視覚計数障害の背景にある問題がより具体的に、衝動性眼球運動を行った場合に直前に見ていた空間上の位置がわからなることによることが示唆された。</p> |  |               |       |